

鮑照賦の構成から見る表現の特色

今井佳子

はじめに

漢代に司馬相如らによって完成された賦という文体は、その後次第に大賦から小賦へ、事物の敷陳（叙景）から作者の感情の表現（叙情）へと変化していった。また古賦から駢賦へと整っていくにつれ、賦は内容的にも形式的にも次第に詩に近くなっていく。このような変化がいつ頃起こったのかは一概に確定できず、漢末には既に賦の叙情化の傾向が見られるが、少なくとも南朝の宋は賦の変遷に於いて一つの過渡期であると言えよう。一般的に劉宋の賦は十分対句を駆使し辞藻を凝らして作られてはいるが、齊以降の駢賦とはいささか風格が異なっているものが少なくない。また、後世まで愛読される賦の名作は齊以降と比較すると宋に多く、顔延之・謝惠連・鮑照・謝莊・江淹（江淹は宋齊梁の三代に出仕）の賦は『文選』に採られている。曹道衡氏は賦の駢儷化に於いて宋代の中でも宋初とそれ以降を分け、宋初の謝靈運・顔延之・謝惠連等の賦は基本的に古賦、少し後の鮑照や謝莊の賦は駢賦とみなされるとしている。また、鮑照の賦の中でも「蕪城賦」や「舞鶴賦」は古賦と駢賦の間、「遊思賦」や「傷逝賦」は駢賦に近いとしている。本稿ではこのような賦の変遷を念頭に置きながら、鮑照の賦を主にその構成に着目して見て行きたいと思う。賦と

いう比較的長い文体ではその内部の構成によって作品の価値が左右するため、作家は当然構成について熟考している。しかし賦の構成について、序の有無や最後の「乱曰」「歌曰」の有無という形式的な点以外に、構成を表現方法や内容に関連して具体的に分析したものは少ないようである。⁽²⁾ここでは鮑照の賦の中でも『文選』に採られている「蕪城賦」⁽³⁾と「舞鶴賦」⁽⁴⁾の構成を考察し、そこから鮑照賦の特徴を考えていきたいと思う。

一 「蕪城賦」の構成

「蕪城賦」は鮑照の十篇の賦のうちで最もよく読まれ、他の作家に少なからぬ影響を与えてきたと思われる。⁽⁵⁾ここでは「蕪城賦」の構成を詳しく見てみたい。段落は原則として脚韻によって区切った。引用が長くなるが、以下が賦の段落ごとの内容である。

① 広陵城の位置

瀟湘平原、南馳蒼梧漲海、北走紫塞雁門。施以漕渠、軸以崑崗。

重江複關之隩、四會五達之莊。

② 全盛時のにぎわい（財力と兵力の充実）

當昔全盛之時、車掛轡、人駕肩。塵閉撲地、歌吹沸天。孳貨鹽田、鑿利銅山。

才力雄富、士馬精妍。

③ 法令の整備

故能參秦法、佚周令、劃崇墉、剗濬洫、圖修世以休命。

④ 城の堅牢さ、及び盛から衰への転換

是以板築雉堞之殷、井幹烽櫓之勤。格高五嶽、袤廣三墳。岬若斷岸、臺似長雲。製磁石以禦衝、糊頰壤以飛文。觀基扃之固護、將萬祀而一君。

出入三代、五百餘載、竟瓜剖而豆分。

⑤ 荒城に群がる恐ろしげな動物たち

澤葵依井、荒葛胥塗。壇羅虺蜮、階鬪麀鼯。木魅山鬼、野鼠城狐。

風嗥雨嘯、昏見晨趨。飢鷹厲吻、寒鴟嚇雛。伏虺藏虎、乳血殄膚。

⑥ 荒城に繁茂する植物、寒々とした光景

崩榛塞路、崢嶸古植。白楊早落、塞草前衰。稜稜霜氣、蔌蔌風威。

孤蓬自振、驚沙坐飛。灌莽杳而無際、叢薄紛其相依。

⑦ 掘や城壁の崩壊、何も無い荒野

通池既已夷、峻隅又以頽。直視千里外、唯見起黃埃。凝思寂聽、心傷已摧。

⑧ 華麗な宮殿を回想、その消失

若夫藻扃黼帳、歌堂舞閣之基。璇淵碧樹、弋林釣渚之館。

吳蔡齊秦之聲、魚龍爵馬之玩。皆薰歇燼滅、光沈響絕。

⑨ 城内の女性達を回想、その滅亡

東都妙姬、南國麗人。蕙心紈質、玉貌絳脣。莫不埋魂幽石、委骨窮塵。

豈憶同輿之愉樂、離宮之苦辛哉。

⑩ 蕪城の歌(まとめ)

鮑照賦の構成から見る表現の特色

天道如何、吞恨者多。抽琴命操、爲蕪城之歌。歌曰

邊風急兮城上寒、井逕滅兮丘隴殘。千齡兮萬代、共盡兮何言。

この賦は前半と後半の対比の鮮やかさが一大特徴となっている。「城」の榮華を詠う前半の部分にも後半の衰亡への布石が置かれており、榮華の裏にその後の衰亡が暗示されるような作りになっている。

前半(①～④)は、生身の人間の描写は登場せず遠景からの客観的描写に終始している。例えば、②の「當昔全盛之時、車掛轆、人駕肩。塵閉撲地、歌吹沸天。(昔の全盛の時代には車は車軸の先を引っ掛け合い、人は肩をこすらんばかりであった。人々の住まいは地を覆い尽くし、歌声と笛の音は天にまで届くほどだった。)」は人間の描写ではあるが、彼らの感情は表されておらず、繁榮の図の一部として風景のように描かれている。前半の重点は、「城」の守りの堅牢さを語るところ、即ち④に置かれているようである。④では、「城」の防備に関する名詞(「板築」、「雉堞」、「井幹」、「烽櫓」)や一字の形容詞(「殷」、「勤」、「岬」、「廬」)によって、もっぱら守りの固さを語っている。また、④に先立つ③では最初の二句「參秦法、佚周令(秦の法を越え、周の法令も越えることができた。)」で法令のすばらしさを言い、次の二句「劃崇墉、剗濬洫(高い城壁を築き、深い堀をほった。)」で「城」の守りを固めることを述べることによって、②の「全盛之時」の様子と④の「城」の「固護」との内容的な橋渡しをしている。しかも③の最後の句「圖修世以休命(この統治を永く続けて、よき命を行おうとした。)」は④の最後の句「將萬祀而一君(万年たつても一人の君主が治めるようにゆるぎないようであった。)」と呼応し、守りの固さが繁榮の継続を保證するはずだとの考えを示している。このように「蕪城賦」の前半は一見さまざまな角度から「城」の繁榮を描写しているようであるが、実は「城」の守りの堅牢さという一点に収斂しているのである。そして、前半の中心である④は場面轉換の言葉をはさんで後半の⑤と隣り合っている。

後半⑤は、気味の悪い動物たちがいきなり登場し、繁茂した植物も不気味さをかりたてている。この部分の描写は非常に印象深く、「蕪城賦」特有の表現といつてよいだろう。⑤は前半②の繁榮の図の正反対に位置する段落と考えられるが、②が客観的な描写だったのに対して⑤はより主観が込められた描写になっている。例えば、虫（虺、蜮）、獸（麀、麋、鼠、狐、麈、虎）、鳥（鷹、鴟）、もののけ（木魅、山鬼）という名詞は、マイナスイメージの形容詞（「飢（鷹）」、「寒（鴟）」や動詞（「厲吻（口先をとぐ）」、「嚇雛（ひよこをおどす）」、「乳血（血を飲む）」、「殮膚（膚を食らう）」）と結び付けられることによって、神経にさわるような不気味さ、気持ち悪さを醸し出している。

⑤はこのように作者の主観が込められてはいるが、しかしまだ作者の感情を直接表してはいない。①から⑥までは一見ほとんど客観的な事物の描写に終始していて、感情のある登場人物は出てこず、作者の感情が吐露されることはない。しかし、⑦からややトーンが変わる。⑦では「蕪城」を見つめる自分という存在を初めて登場させている。

「視」、「見」、「思」という作者の行動に関する動詞が見られ、それによっての⑧⑨の回想の場面を引き出している。

⑧では、かつての華麗な宮殿の様子とそれが消え失せたことを述べ、⑨の「東都姫君、南國麗人。」につなげている。

⑦で初めて表された作者の感情は⑧⑨と進むにつれて徐々に高まり、⑨では「東都妙姫、南國麗人（東都洛陽の妙なる姫君や南國の佳人）。」という生身の人間が回想のかたちで登場する。これは前半②で人間が風景の一部として遠景から描かれていたのに対し、「蕙心紈質、玉貌絳脣（蕙のような心、白い細絹のような肌、玉のかんばせ、紅の唇）。」と描写が詳細である。ここでもかなり具体的な人間の存在を出したことによって、次の「天道如何、吞恨者多（天道とどうなっているのか、恨みを呑んだ者の多いことよ）。」の「吞恨者」が具体的にイメージできるのである。⑦⑧⑨で一段一段と感情移入を強め、⑩の冒頭（或いは⑨の末尾）の「天道如何、吞恨者多。」で感情を一気に吐露しクライマックスとしている。言うなれば①から⑨は「天道如何、…」を叫ぶための長い布石だったとも考えられよう。⑦

⑧⑨の段落は形式的にも類似しており、⑦の末尾が「凝思寂聽、心傷已摧（思いを凝らして静かに耳を澄ませば、心は傷みくだけてしまふようである）」、⑧の末尾が「（皆）薰歇燼滅、光沈響絶（それらは全て香りも失せ、燃え残りさえなくなり、光は沈み、響きも絶えた）」、⑨の意味上の末尾は⑩の冒頭の「天道如何、吞恨者多。」となり、それぞれ二句の四字句で段落の最後を締めている。

以上をまとめると「蕪城賦」は前半の明（榮華）と後半の暗（衰亡）とを対比させているが、これは前半の最後の段落④と後半の最初の段落⑤の印象の落差によるところが大きい。前半①から④は客観的な事物の描写、後半⑤⑥はより主観的ではあるがやはり事物の描写、⑦⑧⑨で徐々に感情移入を強めていき、⑩で感情を歌い上げてまとめるという構成である。

二 「舞鶴賦」の構成と「蕪城賦」との比較

次に「舞鶴賦」についても、その構成を見たいと思う。紙幅の関係上全文の引用はできないが、脚韻をもとに段落分けしてみると、

- ① 導入、鶴の高く遠くまで飛べる資質（「市日域以迴鶩、窮天步而高尋。」まで）
- ② 鶴の美しい姿（「疊霜毛而弄影、振玉羽而臨霞。」まで）
- ③ 人間に捕らえられる（「歲崢嶸而愁莫、心惆悵而哀離。」まで）
- ④ 寒々とした冬の風景（「冰塞長河、雪滿羣山。」まで）
- ⑤ 夜から明け方にかけての澄み切った風景、舞い始める鶴（「始連軒以鳳跽、終宛轉而龍躍。」まで）
- ⑥ 舞う鶴の姿（「風去雨還、不可談悉。」まで）

⑦鶴の美しさに目を奪われる人間、鶴の嘆き（「仰天居之崇絶、更惆悵而驚思。」まで）

⑧鶴の比類なき美しさ・気高さ、人間に捕らえられた鶴の悲しみ（まとめ）

となる。大きく見れば、①②③が捕らえられるまでの鶴の描写、④⑤が風景描写、⑥が舞う鶴の様子、⑦⑧がまとめと、四つに分けられる。ただし、②の冒頭の「踐神區其既遠、積靈祀而方多（はるかに千里を飛んで神仙の区域に踏み入り、千年もの長寿を重ねている）」の二句は意味上は①に入り、⑤の最後の四句「唳清響於丹墀、舞飛容於金閣。始連軒以鳳躡、終宛轉而龍躍（鶴は丹墀で澄み切った鳴き声を上げ、金閣の上を飛び舞う。始めは連軒と鳳のように舞い始め、終わりはくるくると竜のように跳る）」は意味上は⑥に入るが、ここではあくまで換韻によって段落分けを試みた。また、⑥は脚韻の上では四つに分けられる。

「舞鶴賦」は鶴を詠んだ詠物賦なので「蕪城賦」とは趣をやや異にしているが、構成の面から見ると共通点も多い。それは、

1、前半の明と後半の暗を対比させて効果をあげている。明の部分は伝統的なイメージにのっとりた静的な描写であるのに対し、暗の部分は勢いのある動的描写で、鮑照の描写の独自性が強く出ている。「舞鶴賦」では、①②の部分が明の部分にあたる。鶴の描写は生き生きしており、「善製形状寫物之詞（物の状態を写し取る語を作るのにたけている）」（『詩品』）という鮑照作品の特徴がよく現れているが、基本的イメージとしては仙禽としての神聖な鶴、という伝統的イメージにのっとりたっている。「舞鶴賦」で対比されているものは、鶴の高貴さ（明）と人間に捕らわれた悲しさ（暗）である。「舞鶴賦」でも前半と後半の対比はあるが、「蕪城賦」ほどの激しく明暗を隣り合わせた落差ではない。しかし、高貴な鶴の描写の裏側に鶴の悲哀が流れており、それが鶴の美しさをより印象的にしている。

2、「暗」の部分では寒々とした風景を描いている。「舞鶴賦」では、鶴が捕らえられたことを語る③の後、④で四字

句を連ねて冬の寒々とした風景を描いている。

3、後半の中心部分の描写では、四字句でたたみかけるようにして、対象に迫るリアルな表現を展開している。これは賦の題名通り、舞う鶴の姿を描写している⑥がそれである。いずれも四字句の部分は叙情性は込められているものの、作者の感情は直接は表されず、事物の描写を続けている。

4、四字句が終わると、傍観している作者の存在を登場させている。「蕪城賦」では「直視千里外、唯見起黄埃（千里のかなたをじっと見つめれば、ただ黄塵が舞い上がっているのみ）」で「視」「見」という動詞を用いて、それまでと視点を変えていた。「舞鶴賦」でも⑦で「既散魂而盪目、迷不知其所之（見ている者は魂を奪われ目がくらんで、自分がどこへ行くのかわからなくなってしまう）」という表現によって、それまで対象に密着していた視点をややひいて、傍観者も含めた枠組みにしている。

5、後半の叙情部（「蕪城賦」では⑦⑧⑨、「舞鶴賦」では⑦）からまとめの段落につなげ、最後に感情を吐露してクライマックスとしている。「蕪城賦」では、「東都妙姫、南國麗人。」の描写を精緻にすることによって、「天道如何、吞恨者多。」の嘆きにつなげていた。「舞鶴賦」では、「仰天居之崇絶、更惆悵而驚思（天上の故郷のはるかに高く遠いのを仰ぎ見て、さらに嘆き悲しみ心乱れる。）」と言って、最後の段落につなげ、「守馴養於千齡、結長悲於萬里（人間のもとで飼い馴らされて千年もの齢を重ね、万里の空に長い悲しみの声をあげている。）」で結んでいる。逆に言えばこの部分までは、一見客観的な事物の描写に終始していて、作者の感情を直接吐露する場面を出していない。これは、この二つの賦に共通する大きな特徴である。

作品の大部分を、感情を吐露することなく描写を進め、しかも賦全体として見れば叙情賦であり、叙景の部分からも作者の濃密な感情が感じられる。これは、事物や風景の描写によって作者の感情を語る「情景交融」（景と情の一

致)という表現の手法である。⁽⁸⁾このように風景や事物の描写を通じて作者の感情を表す賦は早いところでは王粲の「登樓賦」⁽⁹⁾が挙げられる。しかし、「情景交融」の叙情賦が大勢を占めてくるのはやはり劉宋以降であろう。

鮑照と同時代の謝莊の「月賦」⁽¹⁰⁾は、月の描写を通じて情を語るすぐれた叙情小賦である。次では「月賦」と鮑照賦を比較し、また「月賦」を見るにあたって謝惠連の「雪賦」も一緒に見てみたい。

三 「雪賦」・「月賦」の構成と鮑照賦との相違

前述のように謝惠連は宋初、謝莊はそれより少し後で鮑照と同時代の人物である。謝惠連の「雪賦」と謝莊の「月賦」とは構成や手法が似ており、同じ類型の作品と見なされることも多いが、その内容や風格にはかなりの差異もある。

「雪賦」は、梁の孝王が司馬相如・雛陽・枚乗に雪を詠ませるという設定で、おおまかに分けると、①梁王が兔園に遊び、雛陽・枚乗・司馬相如を呼び寄せると雪が降り始める。②司馬相如が雪を賦す。③雛陽が積雪の歌・白雪の歌を詠む。④枚乗が乱を作る、となっている。全体としては②の司馬相如が叙景、③の雛陽が叙情、④の枚乗が理を説いてまとめるという構成になっており、中でも②の司馬相如の叙景の部分が「雪賦」の中心を成している。一般的に「雪賦」はこの②の部分の雪の描写の妙と、それが③④と展開して全体として叙情小賦となっている点が評価されている。

一方「月賦」は、曹植が応瑒、劉楨に死なれたことを悲しみ、王粲に月を詠ませるという設定である。内容は①応瑒、劉楨に死なれた曹植は憂いに沈む。夜、外を徘徊して月を目にし、王粲に月を詠むよう命ずる。②王粲の月の賦―月の典故等静的な描写、③月の賦―月光に照らされた、静寂で物悲しい光景④王粲の歌―まとめ、となる。⁽¹¹⁾

曹道衡氏は「從《雪賦》、《月賦》看南朝文風之流變⁽¹²⁾」の中で「雪賦」と「月賦」の違いを次のように述べている。「雪賦」も「月賦」も基本的には叙情賦であるが、「月賦」の方がより叙情性が強く、作品全体の統一性がある。即ち「月賦」の叙景は全て作者の情を中心に組み立てられており、叙景の目的は全て叙情となっている。そして、語り始めの曹植の悲愁から最後の王粲の歌にいたるまで作品全体に一つの感情が貫徹しているため、作品の雰囲気が統一されている。これに対して「雪賦」では冒頭に「寒風」、「愁雲」、「梁王不悦」等の叙情的な語彙があるが、これらはその後の司馬相如の雪の賦の内容とは特に関連性が無く、また最後の枚乗の歌とも内在的關係が見られない。叙景に關して言うと、「雪賦」の優れた点は主に司馬相如の雪の描写にあると一般的に言われている。それに対して「月賦」の叙景は楚辭等の表現方法を踏襲しており、描写の獨創性からみると「雪賦」の方に長があるという。曹道衡氏は「雪賦」のように叙景に重きを置いた賦を宋初元嘉体の謝靈運らの山水詩の系譜とし、叙情に重点を置いた「月賦」を齊梁の謝朓らの永明体の山水詩に近いとしている。

「月賦」の叙情性及び作品の統一性は、鮑照の「蕪城賦」・「舞鶴賦」の特徴でもあり、この点では「月賦」と鮑照賦は近い。鮑照の賦もある特定の感情を軸にし、それに沿って事物を配置しており、一、二章で見たように段落ごとの関連性をつけた緻密な構成をとっている。曹道衡氏は、叙情性の強い作風は宋の中葉から始まって齊梁に於いて完成した、その意味では鮑照の詩文と謝朓の作品は同位置とみなされ、永明体の謝朓へとつながると述べている。

しかし、統一性のある叙情賦という点から見ると同類の作品であるともみなされる「月賦」と「蕪城賦」・「舞鶴賦」は、やはりどこか雰囲気が異なっている。その原因は一つは「月賦」と「蕪城賦」・「舞鶴賦」との構成の違いによると思われる。「月賦」は月の靜的、伝統的な描写から始まり、それが情と景の融合した叙情的な描写に移り、最後は「歌曰」でまとめていた。これに対し、「蕪城賦」・「舞鶴賦」では、前半の傳統的靜的描写と後半の叙情的描写及びま

とめの間に、比較的長い叙景の部分がある。この中間部分（即ち後半の冒頭）の叙景の特徴は、その後の部分の叙情性の強さに比べ、客観的描写の連続である。「蕪城賦」では気味の悪い動植物や荒れ果てた寒々しい荒野という、美とは裏腹の描写、「舞鶴賦」では寒々とした風景に続いて、速く飛び回る鶴という非常に動的な描写が続く。もちろん一章で見たように、「蕪城賦」の中間部では「荒」・「飢」・「寒」・「崩」・「孤」・「驚」等のマイナスイメージの修飾語が使用されており、景を表すことによつて情を語る「情景融合」は見られる。しかし、その情は前面には出て来ない。中間部が終わると⑦ではそれをまとめて作者の存在を登場させ、⑧⑨の回想部分、言うなれば叙情部へとつながっていく。このように、客観的描写の中間部とその後の叙情的な盛り上がりは無関係では無く、中間部は叙情部の展開の土台となっており、作品全体の統一性を保っている。「舞鶴賦」でも④⑤⑥の中間部を⑦の「既散魂而邊目、迷不知其所之（見ている者は魂を奪われ目がくらんで、自分がどこへ行くのかわからなくなってしまう。）」で受けてまとめ、「仰天居之崇絶、更惆悵而驚思（天上の故郷のはるかに高く遠いのを仰ぎ見て、さらに嘆き悲しみ心乱れる。）」へとつなげており、やはり中間部があつて初めてまとめの叙情部が生きている。いずれにしてもこれらの中間部には、同時代やそれ以後の賦には見られないような激しい勢いがある。また、対象に密着したリアルな描写となっており、鮑照の「善製形状寫物之詞」という特徴が発揮されている。事物の描写という賦本来の特徴にも合致しており、この点では「雪賦」の司馬相如の賦の部分に近く、つまりは事物の敷陳をもつぱらとした漢賦の特徴に近いと言えるかもしれない。

「蕪城賦」・「舞鶴賦」は「雪賦」のような叙景部と「月賦」のような叙情部の両方を兼ね備えることによつて、描写の獨創性を示しながらも全体の統一性のある叙情的な作品となっている。もちろん、「月賦」にも叙情部に先立ち叙景部があり王粲が賦する冒頭の部分がこれに当たるが、月の典故等を語っており対象に密着したリアルな描写とは

言えない。「蕪城賦」と「舞鶴賦」は何故、「雪賦」のように動きのあるリアルな叙景をしながらも、「月賦」のように叙情的統一性をも保てたのであろうか。それは一つには、前半と後半で明暗を対立させる構図に由来するものと考えられる。「蕪城賦」・「舞鶴賦」の中間部は前半の明（繁榮・仙界での平安）が逆転し暗転した直後に現れている。したがって自ずと前半の明と比較されるために、客観的な描写の中にも暗転した悲哀が底流に流れている。中間部の叙景にこのような悲壮感が流れているからこそ、後半の叙情部に途切れることなくつながっていくのである。これに對し、「月賦」では曹植の悲哀という一つの基調で作品の感情が流れていき逆転がない。そのため、叙情性の強い描写には成功しても、月の斬斬（時によっては奇抜）な描写をしつつ全体の統一性を保つという試みはなされていないのではないだろうか。

叙情性プラス全体の統一性を有した叙情小賦は鮑照以降も多く作られているが、対立の構図によって比較的長い客観的叙景を取り込んだ「蕪城賦」・「舞鶴賦」のような作品はどのように継承されていったのであろうか。それは今後の課題としたいが、最後に対立と叙景という面から、東晋孫綽の「遊天台山賦」を見てみたい。

五 「遊天台山賦」と「蕪城賦」・「舞鶴賦」の構成上の相似点

「遊天台山賦」⁽¹³⁾は、天台山という名山に自ら登って仙都にたどり着き、悟りの境地に至るという内容の賦である。特徴としては、登山の部分の叙景の手法が後の謝靈運の山水詩の先駆を為すこと、仙都を具体的に描いた恐らく最初の作品であること、仙都の描写に於いて神仙と老荘と仏教の融合が見られること等が従来より言われている⁽¹⁴⁾。つまり思想的な点以外に、自然描写や仙都の描写の獨創性が大きな特徴となっているわけである。本章では主に「遊天台山賦」の叙景の部分に注目してその構成を考察しながら、鮑照の賦との類似性を考えてみたい。「遊天台山賦」は、山

に登る前、登る過程、登り詰めた所という三段階に大きく分かれている。その内容は以下の通りである。

山に登る前は、序文―天台山は五岳にも匹敵する偉大な山だが誰も訪れたことがない。本文―①天台山が偉大なのは理がそこに顕れているため。天台山の位置の説明（「應配天於唐典、齊峻極於周詩。」まで）。②天台山は奥深くても行つたことがない。理は二つの奇なる風景を天台山に顕している（「赤城霞起而建標、瀑布飛流以界道。」まで）。登る過程は、③登山の決意を述べた後、険しい道を登り始める（「必契誠於幽昧、履重嶮而逾平。」まで）。④道がゆるやかになり、視界が開ける（「追羲、農之絶軌、躡二老之玄蹤。」まで）。登り詰めた後は、⑤仙都の建物や風景（「騁神變之揮霍、忽出有而入無。」まで）。⑥仙人の集う中で悟りの境地に至る、となっている。

山に登る前の①②はいわば天台山の静的な描写が主である。まだ自分は山の外にいて、天台山の偉大さを語っている。①では「太虚遼廓而無闕、運自然之妙有、融而爲川瀆、結而爲山阜。嗟台嶽之所奇挺、寔神明之所扶持（奥深い宇宙は広々と空虚でさえざる物もなく自然の妙有を動かしている。流れ出た物は河川となり、固まった物は山となる。天台山が特にきわだって優れているのは神が支持しているものであるからだ。）」とまず述べて、自然の「妙有」は具体的に川や山になって顕在化する、また天台山の偉大さは「神明」が支えているからにほかならないからだ、と言う。この理が景に顕れるという理屈は②の「理無隱而不彰、啓二奇以示兆（理は隠れたまままで明らかにならないものはない、天台山は赤城・瀑布の二つの奇景を出現させてその兆しを示す。）」でも語られていて、作品内の理と景をつなげる原理となっている。山に登る過程の③では「踐莓苔之滑石、搏壁立之翠屏。攬樛木之長蘿、援葛藟之飛莖（苔むした滑らかな石を踏み、壁のように立つ石の屏風につかまり、垂れ下がった木にからまる葛につかまり、高く掛かった葛が引つ張りながら進む。）」等具体的にリアルな描写がなされている。④では視界が開け、のびのびとした気分になったことを述べ、⑤につなげている。

それでは「蕪城賦」、「舞鶴賦」に見られた叙情性・作品の統一性・描写の獨創性は「遊天台山賦」ではどうなのだろうか。「遊天台山賦」では鮑照賦のような情と景の融合は見られないが、その代わりに老莊的思想と風景が密接にかかわりあっている。いわば理と景が融合し、理が全体を貫いていると言えよう。これによって作品全体の統一性が保たれている。また描写の獨創性については、登山の場面③④と仙都の場面⑤の描写は具体的で、対象を細かく描写しており、先に述べたようにこの賦の特徴ともなっている。このように「遊天台山賦」は作品の統一性・描写の獨創性を備え、情の代わりに理を中心として風景を描いている。

構成面を見ると、「遊天台山賦」は初めに天台山の靜的な描写、次に登山の具体的な動作の描写や山の風景描写、最後に仙界の描写と悟りに至った境地を描いている。登山の描写③④と仙都の描写⑤を中間部とすると、靜的描写で始まり、中間部で具体的でリアルな描写を続け、最後に理を語る、という作りになる。これは、「蕪城賦」・「舞鶴賦」の前半で靜的叙景、中間で客觀的具体的で動的な叙景、後半で叙情を色濃くまじえた叙景から感情の吐露へという構成に似ているとも思える。「遊天台山賦」でもこの中間部の叙景は最後の盛り上がりへの土台となっているために、叙景のリアルさが作品の統一性をいささかも損ねていない。「遊天台山賦」の中間部③④⑤は描写の間に思想的な表現が入っており完全に客觀的叙景ではないが、叙景はかなり長く連続している。また最初に述べたように後世評価されているのはまさにこの③④⑤の描写の部分である。もちろん、前後半で大きな落差をつけた鮑照の賦と、徐々に山に登っていく孫綽の賦とではその構成が同じであるとは言えないが、構成に変化をつけて場面轉換することによって情（理）と景を描きわけるといふ点からみれば、近いものがあるように思える。違いを挙げれば、「蕪城賦」、「舞鶴賦」では前半と中間部の情は抑制気味であったが、「遊天台山賦」では特にそのような抑制は見られないことである。

「蕪城賦」・「舞鶴賦」と「遊天台山賦」は内容的にはかなりの距離があるようにみえるが、作品の中間部に位置する叙景部分の獨創性とそれが作品全体に果たしている作用を考えると、そこに類似点を見いだすことができるように思われるのである。また、叙景に用いられている語彙についても比較が必要と思われるが、それは今後の課題としてい。

まとめ

「蕪城賦」・「舞鶴賦」は前半の明と後半の暗を対比させた構成で、後半の冒頭（中間部）では具体的に獨創性のある叙景表現が連なっていた。この叙景表現は事物を細かく描写しており「雪賦」の司馬相如の雪の賦の部分やひいては漢賦的な伝統を継承してきたものと考えられる。一方、この叙景は後半の叙情部が展開する土台となっており、構成上不可欠な要素である。この情と景の融合という点では、作品の叙情性と統一性を特徴とした「月賦」に近い。「遊天台山賦」は内容的には「蕪城賦」・「舞鶴賦」と異なるが、やはり中間部に具体的に獨創性のある叙景部分をっており、構成的には近いものがあると思われる。

注

- (1) 曹道衡『漢魏六朝辭賦』（八九年、上海古籍出版社）第六章南朝辭賦参照。
- (2) 程章鈞『魏晉南北朝賦史』（九二年、江蘇古籍出版社）では、西晉の賦は漢魏の賦に比べて構成に工夫を凝らすようになったことを論じている。

(3) 第十一卷・賦己・遊覽

(4) 第十四卷・賦庚・鳥獸下

鮑照賦の構成から見る表現の特色

(5) 『歴代賦彙』によれば「蕪城賦」という題名は鮑照以前には見られない。鮑照以後には呉均の「呉城賦」等「蕪城賦」のイメージを引き継いだ作品が見られる。

(6) 鮑照の詩風は『詩品』に端的に表されている。「善製形状寫物之詞」、「得景陽之諛詭、含茂先之靡嫚、骨節強於謝混、驅邁疾於顏延。總四家而擅美、跨兩代而孤出（張協の詩の奇異さをもち、張華の詩のなよやかさをもつ。骨組みは謝混よりも強く、一気呵成の勢いは顔延之よりも速い。この四人を総合して美をほしいままにしながら、晋・宋二代にわたって孤出している）。「不避危仄、頗傷清雅之調（激しく片寄った表現を避けていないので、頗る清雅の調べをそこなっている）」等の特徴は賦に於いても同様と思われる。

(7) ①の「鍾浮曠之藻質、抱清迴之明心（浮曠の藻質をあつめ、清迴の明心を抱く）」の「藻質」について、黄節は「明遠自造詞。詩品所謂『善製形状寫物之詞』者也。」と評価している（『吳興黃浦亭庾中郎別』の注にて）。

(8) 『文心雕龍』には「情景交融」という語はないが、概念の萌芽はみられるといわれている（「觀物興情」・「情以物興」・「物以情觀」・「思理爲妙、神與物遊」・「目既往還、心亦吐納」等）。古田敬一氏の『中国文学における対句と対句論』（八二年、風間書房）では謝朓の対句を論ずるところで「景情一致」という語で表されている。

(9) 「登樓賦」は「蕪城賦」と同じく『文選』第十一卷・賦己・遊覽に収められている。

(10) 鮑照の生卒年は四一四？—四六六年、謝莊は四二二—四六六年。

(11) 「蕪城賦」・「舞鶴賦」では換韻により段落分けしたが「月賦」で換韻ごとに段落分けすると一段が短くなりすぎるため、より大まかな分け方をした。換韻によると①は三段、②は三段、③は六段に分けられる。

(12) 『中古文学史論文集統編』（九四年、台湾、文津出版社）所収。

(13) 『文選』では、「蕪城賦」と同じく第十一卷・賦己・遊覽に収められている。

(14) 石川忠久「孫綽『遊天台山賦』について」（九一年、『二松』）参照。